

街を行く

第69回 青森 Aomori

いま再びの「コンパクトシティ」へ

「コンパクトシティ」の先駆けとして青森が注目されていたのはかれこれ20年近く前のこと。当時は画期的であったこの街づくり構想実現に小生は期待を寄せていました。しかし現実には厳しいものです。掲げられていた理想と程遠い現実が目前にあります。もし構想通りにいったならば、「商業や行政、居住などの都市機能を集中し、シャッター街と化した中心市街地を蘇らせ、主たる利用者（お年寄り）に優しい街」となっていたはず。でも実際はシャッター街が前より拡大しただけでした。最大の問題は産業がなく、税収が増える道がないことでしょう。高齢者人口密度が高く、福祉コストばかりが増大しています。入る物が減り出るものが増えるなかでは、画期的な新アイデアを掲げても実効性に欠けます。だから、殆どの街と同じく観光収入へ期待する他ないわけです。東京と大阪などでインバウンド需要が伸びています。とは言えここ青森では訪日観光客がすぐ増えるわけはありません。今も昔も一番のお客様は修学旅行の学生さんです。青森の人々はこの現実をどう捉えるのでしょうか。話を街に戻します。青森駅前に立つと線路はここで終わり。青森は本州を通る鉄道の最果てで、北海道へは連絡船でつながっていたのだな、とつっの昔に青函トンネルが開通した今でも郷愁がこみ上げます。ちなみに青函トンネルは信じられない距離の長さです。造った人々の執念と土木の技術力に圧倒されます。このトンネルを渡ってしまうと北海道の話題になってしまうので、



その手前の青森駅前に話に戻しましょう。港の傍には大きな郷土館が建っており、施設内では「ねぶた祭り」が再現されています。ねぶた祭りは単なる感謝祭的なものと違い、雪深い冬を耐え短い夏にエネルギーを燃焼させる、激しい生への執念を感じます。青森県民にとっては短い夏の期間こそが全てであり、残りはオマケかも知れませんね。街のオマケ探しこそ本連載の真骨頂ですから、もう少し歩き進んでみます。実は今回この街を訪れた目的は郊外型商業店舗の調査です。郊外大型ショッピングセンターは駅前商店街をシャッター通りにしてしまった張本人です。それが高齢化社会とともに交通の便の悪さから敬遠され、駅前が再び見直されてきました。高齢者にとって車で行くショッピングセンターはもう限界が来ています。反対に歩いて気楽に行ける繁華街回帰が起こっており、かつて夢敗れたコンパクトシティ構想の再登場に期待されています。青森のような街は、マーケット対象を若者から子供やお年寄りへ、思い切り転換してみたらいかがでしょうか？ 現実を見つめた街づくりしか無いのですから。とことん応援しますよ！



写真は祭りの郷土館と線路の終点。青森の景色はどこも郷愁を誘う

南 一 弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エートス・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役役に就任。